

東亜青年連盟（アジャルーゲー）の成長と

ビルマ独立への影響

——その組織を中心に——

武 島 良 成

【要約】 本論は、日本占領下のビルマにつくられた東亜青年連盟（アジャルーゲー）の検討を通じ、東南アジア占領の意義付けに提言をなそうとするものである。今回はその組織を中心に論ずるが、まず、アジャルーゲーが一元化された命令系統を持ち、制度化の進んだ、五、六万人の人数ある大組織となったことを、その成長過程と共に分析する。さらに同組織が、戦後はバサパラの有力組織の一つとなり、その対英闘争を支えたことを指摘する。アウンサンらビルマ側民族運動のリーダーが認めるように、戦前のタキン党らの大衆組織化が、彼らを苛立たせるほどに困難なものであったとすれば、このように統制力のある大組織が登場した意義は大きく、その意味で民族運動の高次化が起こったといえる。

史林 七九巻二号 一九九六年三月

はじめに

日本の東南アジア占領が現地側にどのような影響を与えたか——殊に脱植民地化の衝撃を与えたか否かの解明は、太平洋戦争の意義付けにとって重要なだけでなく、現代日本人の生き方、アジア諸国とのつきあい方が内胎された問題でもあり、重要な課題である。しかし、日本側原史料は原則的に焼却されている上、現地側の一次史料も、内戦に突入した地域が多く政情不安の影響もあり、客観性と普遍性を具備したものは限られてくる。さらに国家機密に関わる部分も多いため、

一定レベル以上に言及することは難しい。そのため、討議の隆盛とは裏腹に、その礎となるべき実態把握・実証的検討が十分なされてきたとはいえない。

本論は、このテーマを解明する手掛かりとなすべく、日本占領下のビルマにつくられた東亜青年連盟^②（ビルマでは一般にアジャルーゲーと呼ばれる）の活動に注目しつつ、日本のビルマ占領と独立運動との関係を検討するものである。その際、この分野が、歴史学が本格的に扱うべきこれからの課題であることを意識し、実態把握——歴史叙述自体にも重点を置く。また、あくまで一里塚としての研究であり、日本占領の全体的な評価を一挙に行うものではない（その試みは、コンテクスト把握の途上である現研究段階では大変困難である）。

日本占領期のビルマを取り上げた研究は、古くはケイデー、ギュエット、大野徹氏らの論稿^③があり、また最近では、ギュエット論文を修正したテラー^④、資料調査を精力的に行っている根本敬氏らの研究がある。ここでは、日本占領時代に約一万人の自前の軍隊がビルマにもたらされたこと、そのビルマ軍を基盤としつつ、それまで政権への足掛かりをほとんど持たなかったタキン党が力を得、現地側の代表的政治勢力となったことは、最低限認められている。が、住民への心的影響の程度^⑤の解明については、証明が困難な課題であり、万人を納得させ得る結論が出されているわけではない。また、僅か一万の軍が与えられたことを政治的衝撃と称すべきかという判断から、日本占領時代の「インパクト」よりも、一九三〇年代からの民族運動との繋がりこそ注目すべきとの見解も出されている。

筆者としては、二〇世紀前半のビルマを題材とした研究が根本的に不足している現状に鑑み、時期を限定せず、可能な限り実証性の高い成果を積み重ねていくことを長期的目標とする。その中で今回は日本占領期を取り上げるが、それは、①史料を読み進めていると、日本占領期自体の政治的意味がやはり大きかったと判断できるからである。つまりこの時期に、国軍だけでなく五、六万の青年が、アジャルーゲーという、愛国独立をスローガンに掲げ、強い統制力を持つ一組織の下に編成され^⑥（それも半ばは日本側の意図に基づき）、しかもそれが、後にバサバラ^⑦の対英独立闘争を支えることになった

のである。また、②日本占領期の「変化」の解明は、地下活動の時期があり一次史料が残りにくい戦前のタキンらの運動を、逆に意義付けられる可能性を持つからでもある。

なお突き詰めれば、この青年運動の検討は、タキン党が何故に権力を得ることができたかを解明する糸口となる。また、初期パサパラの権力基盤の究明にもなるであろう（そこからは、戦後ビルマが歩まざるを得なかった歴史的必然性が展望できる）。なお、タキン党の政権掌握は、①既にイギリスはビルマに将来の自治領付与を約束していたとはいえ、その履行の保障のない主権移譲の約束が、実際に、しかも早期に実現したこと。②自治領が完全独立になったこと（その最大の意義は、イギリスの経済権益が回収されたこと）。③G C B A系ナシヨナリストの下では考えられなかった、社会主義体制がもたらされたこと、の三点で特に重要である。またアシャルーゲーの活動に、日本の意図が直接、間接に、どのように影響したのかを分析することは、特に日本史にとって重要な課題でもある。

ところで、ビルマ側の史書でアシャルーゲーにふれたものには、三年にわたり委員長を務めたウー・バジャンの短い回想記（五頁のもの）や、軍事政権の御用学者と評されるマウンマウンの著書がある。そこでは、ごく簡単にアシャルーゲーの沿革紹介がなされているが、根拠は必ずしも明確ではない。

史書としての価値が高いのは、一九八四年に編纂を終えた『アシニアシャルーゲーミャーアシーアヨウン・タマイン・一九四二〜一九四五』（東アジア青年連盟・歴史以後、『タマイン』と記す）である。同書冒頭の解説によれば、一九八〇年から元の本部常任委員・県のオルガナイザーらを中心に始められた同事業が、八二年には国家主席のネウ・イン直々の編纂指示を与えられ、八四年に完成したとある。ただし、政府側の検閲作業の途中で八八年の政変を迎えることになり、同書は原稿のまま（事業自体が停止）お蔵入りになってしまっている。筆者は、これをコピーし日本に持ち帰った根本敬氏の御厚意で、再コピーさせて頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。^⑤

勿論同書には、軍事政権正当化の意図も込められており、その上大部の記述は根拠が記されておらず、内容を鵜呑みに



はできない。が、アシャルゲーの規則や、本部と支部が
 交わした文書などの一次史料も収められており、まずこの
 点が有用である。また、厳密な典拠の提示はなくとも、そ
 の他の史料やインタビュアーから得られる歴史像との矛盾は
 少なく、組織にとって不名誉ともいえる事項も記されるな
 ど、^⑤全般に客観性が高い。そのため、参考資料として用い
 ることは可能である。

トの論文である。ここでは、一次史料の使用は「ビルマ軍政史」^⑥
 論拠に、約一〇頁を割いて記述がなされている。史料の限界のため暫定的提言といわざるを得ないが、人気・広域的地域
 展開の指摘は、一応はギョエットの成果だといえる。が、その後は、それ以上に深い検討をなした論考は見当たらず、た
 まに概説書が取り上げる時にも、その意義付けは半ばヤマカンのなされている。

本論では、『タマイン』所収分などビルマ側一次史料、また日本・イギリス側の一次史料や新聞類を活用し、さらに二
 次史料やインタビュアー（ビルマで七八人、日本で一〇人に行った）の成果を補助的に使う（インタビュアーについては、別稿でその内
 容紹介を行う）。そして、可能な限り実証的に検討を行っていききたい。ただし、紙面の都合もあるため、今回はアシャル
 ゲーの沿革紹介を意識しつつ、組織分析を中心になすこととする（活動分析^⑦——軍事講習・ナシヨナリズム講習・対日協力活動
 などは、別稿に譲りたい）。

① 本論の表記は、現地語読みに近いことを意識しているが、歴史

用語として確定しつつあるものは、その習慣に従って用いている。

（「ユンヤ」と「ア」の歴史用語として使用している）。また、原表記を重視し、ハイキリス式、日本式に読んだ部分もある。

② 東亜青年連盟は、ビルマ語で正式には *ashe. asha. tai?*（東アジア）*luemya*；（若者連）*asi: syoun*；（連盟）*-bamaingun*（ビルマ）と訳される。ただし一般には「アジャルーゲー」を略称され、アジャの一言で表現されることも多かった。なまじの名称は、正式には四五年九月に、全ユンヤ青年連盟（All Burma Youth League）*ユンヤ語* *h̄i bama*（ユンヤ）*naingalon*；*stah-ya*（全国関係の）*luemya*；（若者連）*asi: syoun*；（連盟）と改称された（通常、*ハ*、*ラ*と略称される）。

③ J. F. Cady “A History of Modern Burma” 1958, Cornell University; D. H. Guyot “The Political Impact of the Japanese Occupation of Burma” 1966, Yale University; 大野徹「ユンヤ軍史」『東南アジア研究』八巻一、三、四号、一九七〇・七一一年、「ユンヤ共産党の足跡」『アジア研究』二二巻三号、一九七四年。
④ R. H. Taylor ‘Burma in the Anti-Fascist War’ 1980, in A. McCoy “Southeast Asia under the Japanese Occupation”, Yale University Southeast Asia Studies.

⑤ 根本敬「ビルマ近・現代史研究における「日本占領期」の扱われ方」『東南アジア・歴史と文化』一四号、一九八五年）や「ビルマの民族運動と日本」『近代日本と植民地』六、一九九三、岩波書店。氏の「日本占領期観は、論文ごとに微妙な差異があった。『ビルマの民族運動と日本』一六頁では、日本占領の「ビルマ・ナショナリズム」への影響は、日本の意図と無関係にタキン党が興隆したこと、（約一万人）軍が与えられたことに「尻きよう」との表現で、占領の影響の相対化もなされている。が、現在では、氏はこの他にも「アジャルーゲー」による「インパクト」に注目しようとしており（「植民地ナショナ

リストと総選挙」『A A言語文化研究』四八・四九合併号、一九九五年、九六頁）、その点では筆者と見解は一致している。

⑥ 度論、それは戦前からの民族運動・学生運動の延長線上にある。が、制度化する進展・組織の拡大・軍事訓練の施行という点で、独自に意義付けられる。

⑦ 普通、反ファシスト人民自由連盟と訳される。当初、委員長はアウンサン、書記長はタキン・タンマン。

⑧ イギリスは、第一次大戦時にインドに約した自治導入を、戦後は弾圧立法（ローラット法）で踏み止まった「前科」がある。

⑨ イギリスは、その経済権益を残すことに尽力し、四四年末決定のブルプリントでは英系企業の復活を優先し、四八年の独立付与時にも、資本や軍権の残置に力を入れ、実際一時はそれに成功していた。

⑩ ‘The All Burma Youth League’ 1983, in ‘Burma’ III. 前掲ケイディー論文がその概要を紹介している。

⑪ U Maung Maung ‘Burma and General Ne Win’ 1969, Asia Publishing House; ‘Burmese Nationalist Movements 1940-1948’ 1989, Kiscadale Publications.

⑫ タテイン（*thamain*）は歴史の意。ページ番号は八六七頁で付られているが、前書きや折り込み、写真などを合わせると、一〇〇〇頁近い分量になる。また、六〇九頁以降は資料編、八五六頁以降には編集グループ・編集執行機関員の名が記されている。同書所収の原史料はそのコピーも含め、現在、元副委員長のウー・チョーミンが保管と

⑬ 筆者はその後、元編集グループのウー・タントゥン、ドー・イーチエインに会い、彼らの所持本とコピーとを突き合わせ、同一内容であることを確認した。

⑭ 田辺寿夫、根本両氏の指摘するように、ビルマの軍事政権はその正

統性を、国軍が、国民の協力を得ながら「ファシスト日本」と戦ったことに求めている。『タマイン』も、国民と軍が一体となり対日蜂起に立ち上がったとの記述を、ヤマ場としている。

⑮ 一部の県オルガナイザーが組織の方針転換に反対してやめたこと、その方針転換が、バモオへの対抗という政争に因っていたこと、泰緬鉄道は労働者駆り出しに協力したことなど。

⑯ ビルマ方面軍が四三年九月に、占領政策の概要を陸軍省に報告した冊子。日本では防衛庁戦史部などが所蔵。筆者の引用は、特記のない限り一三〇—一三一頁による。

⑰ 主活動は、ランガーダン（体・知・徳・財・愛の力）向上のトレーニング、公共奉仕、軍事訓練、泰緬鉄道の労働者募集、軍人（B D A）の募集など。

第一章 アシャルーゲーの組織

第一節 アシャルーゲーの設置

A 設置の経緯

アシャルーゲーは、一九四二年六月に発足した^①。その経緯をまず『タマイン』から辿ると、「ヒラヤマ（平山。B I A の水上支隊長、三月に戦死——以下括弧内は筆者の調査による）」「ナガユ（永代。軍属としてB I A入り）」「カワウチ（川内。軍属としてB I A入り、のち軍政部長に）」「トモダ（友田。チェンマイ領事館員から軍政部長に）」らの日本人が、ラングーン大学学生同盟の元委員長のコック・バジャンと出会い、また協議して、日本の青年団の活動を踏まえながら、青年組織の設置を検討したのが発端だとされている。

同書はさらに、三月にはバジャンがアウンサンやタキン・ミヤ、タキン・タントゥン、タキン・コッドフマインらタキン党の主要幹部と会談し、戦時下の住民への奉仕を目的とすることで全員が合意したとする。そしてトモダとカワウチがアドバイザーになるのを承知し、五月初めに第一五軍軍政部長（のち七月二五日に軍政監部になる）総務部長の中田大佐と協議し、その認可を得たという。そして、タントゥンやバジャン、カワウチらが規則^②を起草し（原史料には、タントゥン、バジャン、フラマウン、トモダ、ピカワが署名）、六月二八日の開会式にこぎつけたのだという。

一方、四四年初頭まで顧問を務めた友田光男氏の回想記^⑦では、四月初めに永代氏を訪ねてきたバジヤンと初めて出会い、川内氏も含めて新しい青年運動を興すべくタキン黨員や学生運動家、青年向上組織関係者に呼び掛け、五月末には中田大佐の許可を得たとされ、話は概ね一致している。また、氏は、タントゥンやコック・トゥンフラ（アウンサンの副官）らと討議を重ねたとも記しており、アシャが当初からタキンの上級幹部と強く関わっていたという『タマイン』の記述を裏付けている。

このように、アシャルーゲーの設置の直接のきっかけをつくったのは、正規軍に所属しない日本人と、ビルマ側のタキンや学生運動系統の活動家であった。が、その一方で、『タマイン』自体認めているように^⑧、このような青年団を設けることは、当時日本が一般的に行っていた政策でもあった。つまり日本は、本国の大日本青少年団を初めとして、満州や中国にもこのような戦争協力のための青年組織をつくっており、アシャルーゲーはそのビルマ版であり、いずれこの種の青年組織は設置される必然性を持っていたといえるのである。

B 日本側の設置目的

それでは、この種の「心身の鍛練」を目指す青年組織の例を見つつ、日本側の設置目的を検討してみよう。

大陸では、当初は雑多な青年団がつくられたが、最終的には満州では協和青年団、中国では新民会青年団に統合されていき、南方占領地では、フィリピンのカリバビ青年団やジャワ青年団^⑨などが知られている。ここでは、スポーツや勤労奉仕・竹槍訓練がなされたが、各々の青年団には対日協力の「尖兵」として、住民全体を動かす率先団体としての役割が課されていた。そしてその背景には、若者が新たなイデオロギーを注入し易く、活動的でもあるために、占領政策で利用価値が高いとの発想^⑩が存在していたといえる。

アシャルーゲーについても、それを設置した日本側の狙いが、機密史料である「ビルマ軍政史」には次のように記されている。「(現地人) 青年ラシテ拳ゲテ大東亜戦争ニ協力セシメ、且ツ全原住民ノ推進母体タラシム」ため、また「全緬甸

原住民ノ戦時思想ノ善導ニ努メル」ためだと。つまり、かなり露骨に対日協力の率先組織としての位置付けがなされていたのである。また、終戦直後に第一復員局で作製された「ビルマ軍政の概要」^⑧では、「独立ビルマの中堅層養成の趣旨で」設置されたとされ、『朝日』四二年六月二十九日にも、「新興ビルマの尖兵」として設置されたと記されている。「ビルマ軍政史」の記述を含め、いずれの史料からも、青年層に指導させながら住民全体を引っ張っていくという、日本側の意図が窺える。その引っ張る方向は、「大東亜共栄圏」建設のための協力態勢^⑨へであった。

また、開戦当日に日本政府が取り決めた「日英米戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱」^⑩や、四二年十一月一七日に閣議決定された「報道、啓発及宣伝(対敵ヲ含ム)機能ノ刷新ニ関スル件」^⑪に見られるように、日本はこの戦争が長期化するとの見通しを立てていた。だからこそ、将来の「大東亜の担い手」たる青少年に、国内・国外共に重点を置いた「教化」を目指していたという面もある。例えば「ビルマ軍政史」でも、アシャルレーギーから日本に留学生を派遣したのは、「将来有為ナル指導者タルヲ期待セラル」ためだと記されている。『グレートイェアジア』^⑫でも、ビルマの未来は若者にかかっており、アシャの活動ではそれが意識されている(四三年三月七日)、アシャの幹部は、近い将来東亜のために働く良いリーダーになるだろう(同日)、アシャのメンバーのような次の世代が、新ビルマの防衛隊である(一月一六日)などと、アシャがビルマの将来を担うことがスローガンとされていたことがわかる。さらに『トゥーリヤ』^⑬四四年二月三一日に見られる、アシャ第二回会議での本部委員会の発表でも、次の時代にビルマを担う若者の向上を目指すことが、再確認され、謳われている。

ただし、活動目的が「アシャルレーギー規則」として成文化された際には、日本側の露骨な政治的要求が突出して記載されたわけではなく、むしろ本音は隠されている。即ち規則の冒頭(第一条第二・三項)では、組織の大方針が次のように記されている。①ビルマの独立・進歩のため、各人が減私的に国に奉仕する。②国民の進歩のために講習会を行い、また図書館を開く。③奉仕活動を行う。④東アジアの諸国・国民との協調・交流をなす。

第二節 上級幹部について

次に、アジャルーゲーの中枢員となった本部常任委員、県（カヤイン）の最高責任者であるオルガナイザー^⑮の性格分析を行う。

A 本部常任委員

まず、本部委員会を構成する各部とその責任者であるが、『タマイン』資料編所収の本部の発給文書からは、書記長（コウ・ニールー）、ボランティア部長（コウ・キンソー、コウ・ティンウイン）、ニャナバラ部長（コウ・バシン）、女性部長、情報部長（コウ・トゥンフラ）などの陣容が断片的に確認できる。^⑰

『タマイン』は各部とその長官の変遷を、詳細に記している。ただし根拠は、直接には四二年時の一同の集合写真（バジャン以下二人）が掲げられる程度で、細かな提示はない（他部所では、『ミャンマアリン』四三年二月一七、一八日、四四年九月二日、『トゥーリヤ』同年二月三日に見られる人事が示されている）。が、前記の本部発給文書や友田回想記^⑱に記される名、太田常蔵氏の記す四四年三月地点の人事、あるいは『グレートアエイジア』四四年八月三十一日の記事ともほぼ陣容が一致するので、信用に足るといえる。

同書は、発足当初、委員長（バジャン）、副委員長、会計、体育担当など一人（うち三人はタキンの名を冠す。また書記長のコウ・ニールーはタキン・タントウンの弟）が役職に就いたとし、そのすぐ後の第一回改編については、メンバー一〇人を経歴入りで紹介している。このうち、確実に元の学生運動の関係者と判断できるのが五人、非学生運動系の民族運動関係者と判断できるのが二人である。^⑲

この四二年時の本部常任委員のうち、四五年時までその地位を保ち続けるのは、バジャン、ニールーと、コウ・ティンウインの三人である。『タマイン』は、ビルマ軍入りなどのため、委員をやめる者も多かったとしている。その代わりに、

バジャン以下が手取り足取り教育した県のオルガナイザーを逆に本部に迎え、常任委員としたというのである。

B 県オルガナイザー

この、県オルガナイザーの講習についての『タマイン』の記述は詳しい。各地に支部をつくるために、奉仕活動の経験者、人道者、健康な者を二〇人集め、四二年七月一九日から本部（所在はヤンゴン）で二ヶ月の講習を行ったという。(リストを見ると、年齢は二一から三三歳、ほぼ高卒か大卒者)。続いて二二人が九月末から第二次の講習を受け、一二月中旬には卒業したという。この講習は「ビルマ軍政史」が記す、四二年八月からの二回にわたる「指導者の訓練」に相当すると考えられる。また太田常蔵氏の記す、地方に派遣する三十人（メンバーを集める役員）への幹部講習、『グレートアジア』四三年三月七日の、トレーニング受講者の地方派遣・支部設置との記事、友田回想記もこの講習の存在を裏付けている。

『タマイン』を頼りにその講習内容・講習方法や特徴を記すと、以下の点を指摘できる。①講習は、本部常任委員（バジャンら）が直接行い、朝から晩まで懸命に行った。②講習内容は、組織の運営法、バランスガーデン（体・知・徳・財・愛の力）や愛国心の強化、体操、スピーチのやり方、福祉事業の行い方など。③この講習で、本部常任委員と県オルガナイザーの間に、強固な仲間意識・絆ができた。実際、『タマイン』編纂前から、元の本部常任委員と県オルガナイザーが自発的に集っていたことから、両者は確かに強い絆を持つことになったといえる。

第三節 地方支部の設置・拡大

次に、地方支部の設置・拡大の過程を見てみよう。

A 地方支部の設置

アシャルゲール規則第一五条では、支部設置に関し以下のように定められていた。(第一項)本部は多数の支部を全国につくる。(第二項)本部から責任者を二人ずつ派遣し、支部では他に何人か幹部を選ぶ。(第三項)支部の委員会の構成は、

委員長、副委員長、会計、書記、カヤバラ担当、図書担当など。（第五項）本部から派遣された二人のうち一人は書記に、もう一人はカヤバラ担当になる。——実際この規則に基づき、第二節で見たオルガナイザーが、各地に派遣されて支部をつくった。友田、太田前掲書や『グレートアエイジア』四三年三月七日も、そのことを伝えており、また『タマイン』もより具体的に誰をどこに派遣したかを記している。

同書は、オルガナイザーの第一次講習生のうち一八人を、四二年九月に、マンダレー、ニューシユエ、タウングー、ピイ、ヒンダター、ミヤウンミヤ、ピャーポウン、モラミヤイン、ダーウエの九つの町に二人ずつ（一人は書記、一人はカヤバラ担当）派遣したとして、全員の名を記している（根拠には『ミヤンマアリン』九月一日があげられ、資料編にはその際の任命書と推薦書が所収^④）。その際、ただで家を貸してもらうなど住民の協力があつた。また日本の軍政機構や憲兵の協力を得て、一〇月までに開設に成功したのだという。さらに第二次講習生のうち一九人が四二年末に、バーモ、シユエボウ、ザガイン、モウンユワー、ミンジャン、ピンマナー、シンプー、ハンターワデー、インセイン、タヤワデー、モラミヤイン、ピイの各町に派遣され、支部を開設したという。この時も原則的に一人が書記、一人がカヤバラ担当になることになっていた。

B 地方支組織の拡大

『タマイン』によれば、アシャの四二年末のメンバー数は、僅か一五〇〇人だったという（根拠は示されず）。それが、四二年一二月に、バモオを長とするウンダン組織（民防衛団または警防隊^⑤）が設けられたために、自分達の組織の意味がなくなる心配して、対抗上急速な拡張を目指すことになったという^⑥。

そして、支部を細かく設置する方針が打ち出され、町に限定せず村にも支部を置く、大きな都市には区ごとに支部を置く、書記やカヤバラ担当者を地方で雇ってもよい、派遣していたオルガナイザーが県全体を請け負う——などの規定が導入されたという。さらに『ミヤンマアリン』四三年三月四日では、人数制限、支部制限が解かれ、大拡張を行う旨の発表

がなされた。

『タマイン』はなお、三月にはメンバーが三一七八人、支部は四〇になり、県レベルのオルガナイザーの担当分けもなされたとする(新体制の県オルガナイザー一覧は一三四頁、一三五頁にあり)。そして六月には一〇五支部、一万一〇〇〇人以上に成長したという(ただし全て根拠なし)。

第四節 組織統制について

最後に、地方支部がどのように統轄されたか、日本側の指導はどのようになされたのかを検討する。

A 支組織統制の強化

「アシャーラーゲル規則」第三条では、本部常任委員会には「組織の細かな仕事」まで取り決める権利が付与され、また第一七条では、支部の移転、廃止、役職からの永久追放を指令できるとされており、中央部の専権が強く意識されている。が、第二四条では、本部常任委員会あくまで暫定組織であり、四二年七月一日から一年半を担当するものとされている。その間に規則を現実に合わせて修正し、また支部の委員長と書記長らを招いて全国会議を開き、選挙で常任委員を選び直すというものである。ただし『タマイン』によると、実際には戦争遂行という悪条件のため、このような会議が行われることはなく、^⑤暫定組織であるはずの本部常任委員会の統制力は、次第に強化されたのだという。

実際、本部発給の命令書を見ていくと、漸次細目を取り決められ、支部統制の強化が進んだといえる。^⑥まず『タマイン』が画期的命令と評する四三年六月五日の第八・九号指令(全文一五ヶ条が収録)では、支部が本部に連絡・報告する文書の内容と様式が細かく指示され、また県オルガナイザーが巡回して査察する際に支部が協力すること、支部が集めた年会費の半分と寄付金の四分の一を本部に送ることなどが定められている。また『タマイン』には、この時期、中央からの派遣者がつくったもののみが、支部と認定されていたことも記されている。

さらに、四三年一月二八日に本部が支部に送ったメンバー募集指令第一号では、(第二項)メンバー除名権を県責任者に付与。(第三項)バッジ類を支部が独自にすることを禁止。(第四項)毎月、メンバーのリストに移転者、退会者のリストをつけて報告する。(第五項)県責任者に、県内全支組織の委員会の人選、交替の責任を付与。(第七項)支部は、県責任者が簡単にチェックできるように、文書類をいつでも用意しておく。(第八項)支組織の委員会は、中央から与えられた任命書をいつも持っておく。(第二項)県責任者は、支組織の①委員長②副委員長③書記長④会計⑤戦争成功⑥情報⑦ニャナバラ⑧カヤバラ⑨図書館の各長、あるいは女性部の各長を決め、委員会をつくらせる。(第一六項)村でメンバーが二五人以上になれば集団として認知できるが、一〇〇人を超えるまでは近くの他の支組織が統括する。また、疎開地に暫定的に集団をつくれる。(第一七項)支組織の委員会は、毎月実施事項の報告書を県責任者を通じて本部に送る。会計責任者は出納報告を毎月送る。——などの細かな統制規定が導入された。

このように、中央による支部統制の制度化は漸次進展した。その統制は、主に、本部常任委員会と「強い絆」を持つ県オルガナイザーの権限を強化することでなされた。なお四四年にもこの方向性は強化され、五月一四日付命令で、支部が県内の「政府」機関や他県の支部と連絡する時には、県オルガナイザーを通すべきことが定められた。またバモオの中央政府と連絡する時には、本部常任委員会を通すべきことになったのである。

B 日本の内面指導

「ビルマ軍政史」は、アシャルゲールに対しては軍政監部の文教部が内面指導を行っていると記している。そして指導を「完カラシムルタメ」、部員を特派しているという。この部員とは文教部教育課の友田光男氏のことだが、実際アシャルゲールは、日本軍への直接的な協力（泰緬鉄道の労務者募集、プロバガンダへの協力など）にも力を注ぎ、四四年頃までは基本的に日本側の統制を逸脱せずに活動していた。

友田氏の回想記では、氏は(川内氏を同伴する時を除き)常に單身ビルマ側との折衝に当たっており、中央にも地方にも、

氏以外の日本人顧問の存在は窺えない。『タマイン』も、顧問については「トモダ」「カワウチ」の名を挙げるのみで、地方支部に日本人顧問がいたとの記載はない。筆者が、支部委員や本部常任委員など、配置の有無を知り得る立場にあった人達に行ったインタビュ^⑤でも、悉く配置されていなかったとの返答だった。

また、史料の限界のため明確な論証はできないが、常識的に判断すれば、顧問の他に憲兵隊が常に監視していたことが予測できる。この点について『タマイン』は、アシャ本部は毎月憲兵隊に報告を行い、地方支部にも憲兵隊が頻繁にやって来て見張っていたこと、支部側が幹部名やメンバー数を報告することがあったと記している。

肝心の、友田氏の組織運営への介入の度合いについては、氏は自身の主張を強制したのは、東亜青年連盟の名称のみ(全ビルマ青年連盟でなく)だと記している^⑥。勿論、対日協力が全面的にビルマ側の自発的意志に基づくとは考えられないので、これは割り引かねばならぬ記述である。しかし、『タマイン』が友田・川内氏の名を出す際には、常に「日本の友人(friend, 'swe)」との称号が付されており、彼らは真に「大東亜共栄圏」をつくり、ビルマの独立・発展を目指す誠意を持っていた人達だとの評価がなされている。この好意的記述からすると、少なくとも友田氏の在任中(四四年初頭まで)には、激烈な意見衝突はなかったものと判断できる^⑦。

結局、日本のアシャルーゲー統制は、憲兵隊の監視というビルマ側にとって好ましくない側面もあったが、何から何まで縛られたものではなく、一定の自由さがあり、また協調する余地があったものと評価できる。

① 「ビルマ軍政史」、『朝日新聞』(以下『朝日』と略す) 四二年六月二九日などによる。

② 『タマイン』では設置経緯は四〇〜四四頁でふれられている。

③ 永代、川内氏の経歴は、『ビルマ独立秘史』(泉谷達郎、一九八九、徳間書店)巻末の「南機関員名簿」による。友田氏は大川周明の「大

川塾」(東亜経済調査局附属研究所)第二期生(四一年四月卒業)。同

塾は満鉄、外務省、陸軍省出資で、東南・西南アジア派遣の情報員養成を目的としていた。同塾については『大川周明』(大塚健洋、一九九五、中公新書)一七〇〜一七四頁を参照された。

④ バジヤンの経歴は、『Who's Who in Burma 1961』(1961, People's Literature Committee & House)を参照。三七年〜三八年にはラングーン大学学生同盟の委員長(三五〜三六年にはアウンサンも同委員)。

任者、他の執行機関派遣の三人、名譽委員を置くことになっていた。本部常任委員会は、五人の要求で召集でき、七人の出席が必要で、委員長が座長を務める規定である。

④0 ニヤナバラ (Nana, bala. || 知力) の向上は、カヤバラ (kaya, bala. || 体力) の向上と共に、アシャルゲーの中心訓練活動の一つ。

④1 例えば『書記長・ニーレー』の署名の入ったものは、四三年三月(編月) 一二日、四四年五月一四日、六月一四日付のものがある。

④2 『タマイン』五九〇六八頁。

④3 前掲友田三二頁。

④4 太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』一九六七、吉川弘文館。氏は軍属としてビルマに滞在し、「ビルマ軍政史」や自身のメモを元に本書を作成。五八五頁にはアシャルゲーの中央幹部一覧が記載されている。

④5 『朝日』四二年六月二九日では、アシャルゲーの中央幹部が「ラングーン大学で鳴らした反英闘争の猛者揃ひ」だったと記されている。実際、全員ではないが(コウ・ゾウウエイツやマ・イーチェインは元々の民族運動家ではない)、大部は民族・学生運動関係者だったといえる。南田みどり氏の労訳『東より日出ずるが如く』(上)(中)(下)(ティンペーミンの小説、一九八八・八九、勁草書房)も、繋がりを見出す参考になる。

④6 秘密には、講習段階から、オルガナイズ担当地域が県と定められていたのではない。当初は kwe: p'we: (支部) オルガナイザーとの名称が与えられていた。

④7 以下第三節Aまでの『タマイン』の引用は、一〇六〇二九頁による。

④8 『タマイン』一〇七頁の後と二二三頁の後に、第一次・二次講習生の集合写真がある。

④9 前掲太田二五九頁。

④0 前掲友田三三〇三四頁。

④1 例えばバジヤンは、組織の目的や東アジア諸国の歴史を教え、カヤバラのコウ・ゾウウエイツは体操を教えたという。

④2 『タマイン』によれば、その後四四年二月から、人員補充の目的で第三次講習を行い、受講完了者九人(一八六頁の一覧では、ほぼ全員が元支部の幹部)を、八月以降各地に派遣したという。

④3 この他、一年四ヶ月の長期的講習(本部常任委員に加え、友田・川内氏が日本語を講義)で養成した、二〇人のブライベート・スクール生にも、四四年以後県オルガナイザーの任が与えられていく。

④4 『タマイン』六五三頁。

④5 『タマイン』一〇六頁。

④6 警防隊については、ギユョット、太田らが若干ふれている。史料としては『ビルマ軍政史』(四九〇五五頁など)、「民防衛団報告書類綴」、「第一八師団防衛月報」(全て防衛庁戦史部蔵)などが詳しい。数々日本本国の隣組に例えられるが、バモオを頂点とする行政機構が主導して、防空・竹箱訓練、労働奉仕などを行った。アシャルゲーとは並立・対抗関係にあり、何度もバモオはアシャルゲーの吸収を試みた。

④7 以下は『タマイン』一二九〇一三五頁による。

④8 『タマイン』五四〇五九頁。

④9 以下は『タマイン』一三六〇一七〇頁を参照。このうち第八・九号指令は一三八〇一四三頁、メンバー募集指令第一号は一六三〇一六八頁に全文所収。

④0 本部の統制が細部にまで及んでいたことを示す例として、四三年三月(編月) 一二日の、本部書記長からアシャルゲーのミンフラ町支組織の書記長への発給文書をあげておく(『タマイン』七八五〇七八六頁所収)。この時、カヤバラ責任者を支部が「運動類に関する (Gozat: k'ounsa:)

『(a)書記長』と名付けたことに對し、「カヤバラ責任者」の語を使えとの命令が下っている。またこの後の一〇月八日の命令書（『タマイン』七八六頁所収）では、読むのが大変なので本部への報告は次回からは簡潔に記せと指示され、確かに報告がきちんとして行われていたことも確認できる。

① 『タマイン』七五七頁所収。

② 「ビルマ軍政史」附表の四三年七月三十一日現在の「緬甸軍政監部職員表」では、文教部員三九人の中に友田氏の名はあるが、川内氏の名はない。この時期の川内氏は、昭和通商で活動しつつ私的に協力していたのであろう。

③ 例えばシュエボウ支部に行き、労務者募集をした話が詳しく記されているが、同支部に日本人顧問がいたとの記載はない。

第二章 支組織の様相

本章では、地方支部の展開・具体像について検討する。また、（組織分析からは多少逸脱するが）アシャルーゲーが確かに人気を伴っていたことを指摘し、それを順調な組織拡大の大要因として提示する。さらにその人気の原因にも若干の言及をなす。

第一節 アシャルーゲーの地域展開

A メンバー数

新聞など公開を目的とした史料で、メンバー数の変遷を追いかけると、四三年半ばには一万五〇〇〇人（『読売報知』八月三日、『朝日』八月四日）、年末には三万二六二一人（本部常任委員会作製の第一回大会用冊子——公開用）、また四四年前半には

④ 『タマイン』は、日本側の指導については、四〇〜四三、七三〜七五、三二八〜三三三頁などで記している。

⑤ 『タマイン』に名が明記されている幹部の中では、本部常任委員のウー・ゾーウエイツ、ドー・イーチェイン、支部委員のドー・チンチン、オン、ウー・ソウミン、ブライベート・スクール生のウー・タン、トゥン、県オルガナイザーのウー・コウコウジーへのインタビュー。他に、対日レジスタンス時のアシャ指導者や、憲兵隊勤務の通訳なども、配置の有無を知り得る立場にあったといえるが、彼等の返答も、悉く「否」であった。

⑥ 前掲友田三三頁。

⑦ むしろ『タマイン』三二八〜三三五頁には、日本軍側の協力譚が具体的に記されている。

四万人〔『ミャンマアリン』四月五日、『グレートアエイジア』六月二七日〕となつてゐる。さらに『タマイン』は、四四年半ばに七万以上、四五年四月初めに八万以上になつたと記しているが、根拠は示されていない。

実際のところ、機密史料である「ビルマ軍政史」には、四三年半ばに二万人と記され、また『タマイン』所収のコック・アウンミンの身分証明書^⑤（幹部用——任期は四四年三月から）は、入会番号が三万六二二であり、アウンミンの入会時（三月以前）には既に累計三万を越すメンバーがいたことが確認できる。また、この組織が最後まで人気を保ち続けたことを考慮に入れると、さらなる増加を推測できるので、最終的に少なくとも五万人程度の加入者がいたとの推定が可能である。

B 地域展開

アシャルゲーの拡大過程については、第一章で見てきたが、次に、それがどの地域にどのように展開したのかを検討する。

諸史料中、最も詳細にその分布を押さえたものは、「アシャルゲー支組織と集団」の支部一覧である。ここでは、全支部が、支組織 (csi: youn: kwe:) と村落集団 (ce: ywasu:) に分けて記されているが、その数を県別に記せば次のようになる。

バーモー↓町に二、カサー↓町に一、シュエボウ↓町に七、村に一六、集団二、モウシュワー↓町に六、村に一、集団六、ザガイン↓町に六、他に四、集団二、マンドラー↓町に一四、村に二、集団二〇、チャウツセー↓町に四、村一三、集団一、メエッティラー↓町に三、村に七、集団一五、南シャン↓町に一四、集団二、北シャン↓町に七、ミンジャン↓町に八、集団四、ピンマナー↓町に六、村に五、集団五九、パコック↓町に七、村に二、集団六、シンブー↓町に七、村に二、集団一、イェナンジャウン↓町に一〇、集団四、タイエツ↓町に六、村に三、集団五、ラカイン↓町に一、他に一、ピー↓町に一七、村に六、集団五四、タヤワディー↓町に二二、村に二、集団四六、インセイイン↓町に七、村に七、他に二、集団一〇、ヒンダター↓町に一一、村に二、他に二七、集団四、バテイン↓町に九、村に二、集団一七、ミヤ

ウンミヤ↓町に六、村に一、他に一、集団三、ピャーポウン↓町に四、村に一、集団一二、マウビン↓町に四、村に四、
 集団四、ハンターワディ↓町に六、村に一七、集団一五、ヤンゴン↓一八、バゴ↓町に一一、村に七、他に一七、集
 団七、タウング↓町に一一、村に一、他に四、集団一五、タトウン↓町に四、他に四、モラミヤイン↓町に六、村に
 二、他に一、集団一、ダーウエ↓町に二、ミエイ↓町に二

このように、支部は北端のカチンやホウンマリソクを除去、ほぼビルマ全土に広がっていた。ただし、平野部の密度に比べると、バーモアやカサー、ラカインなどの最前線地域、あるいは英系ゲリラが根を張るカヤー、カイン地方には、支部は極めて少ない。また、シャン高原（特に北シャン）も、支部の密度は低い。

『タマイン』は、シャンでの低調の原因を、一つには同地が四三年末まで日本の直轄地であったため、積極的行動が行い難かったことに求めている。その後、四四年になり伸長させ得たものの、北シャンでは「土侯」の力が強く、南シャンほどには展開できなかったのだという。またラカインについては、戦争の最前線のため募集が困難だったのだと説明されている。ところで日本側史料を見ると、シャンやラカイン、カチンには、アシャルゲーとは別個の、日本軍に直属する青年団・青年戦闘隊が広範に組織されていたことがわかる。その役割は、最前線であるため、敵状搜索・スパイ捕縛・実戦への参加など、補助兵力としての性格が強いものであった。このように、日本側の駐屯部隊が最前線で直轄の青年組織をつくっていたことは、結果的にこれらの地域でのアシャルゲーの発達の障害に繋がった側面があると、推定できる。

第二節 メンバーの特質

A 地方幹部について

第一章で見たように、地方組織の幹部（執行委員）は、制度化の進展に伴い、最終的には、県オルガナイザーが人選責任を持つことになった。

ではその結果、どのような人が幹部になったのかを検討する。その際、具体例としてピャーポウン町支組織を取り上げるが、「アシャルゲー地方幹部一覧」は、同町について男性部一〇、女性部七の役職とその責任者(二三人)を記している。その中で、書記長のウー・コックジー(以下KKGと略)と女性部警防長のドー・チンチンオウン(TTOと略)には、話を聞く機会を持たた。また、一般メンバーのウー・チョーウィン(KW)、ドー・キンニョン(KN)、同町出身のウー・バヘイン(BH)にもインタビュアーをした結果、少なくとも次の各幹部は、日本の侵攻前から学生運動に関係していたとの結論を得た。

① 副委員長のDr. フラシユエ(TTO、BHの情報による。フラシユエは三十人志士のボウ・レチャーの兄で、友田回想記にも運動家として登場^⑪)、② 同コック・オウンマウン(TTO、BH。ティンペーミンの著書にも、三〇年代からの学生運動リーダーとして登場^⑫)、③ 同コック・トゥンシユエ(TTO)、④ 会計のコック・ソウミン(TTO)、⑤ 書記長のコック・チャーディン(TTO)、⑥ 同コック・コウジー(TTO、KW、KKG、KN)、⑦ カヤバラのコック・フラタウン(TTO、KW。フラタウンは本部から派遣)、⑧ 女性部カヤバラのマ・トゥンチャー(BH)、⑨ 女性部ニャナバラのマ・キンチャー(BH)、⑩ 女性部警防のマ・チンチンオウン(TTO、BH、KW)、⑪ 女性部委員のマ・ニユンニユン(TTO、BH。チンチンオウンの姉)。

このように、ピャーポウンでは、戦前からの反英学生運動の担い手が、アシャルゲーの地方幹部となる傾向があったことが、かなりはっきりと窺える。ただし、同町は、バジャンが真っ先に組織結成の相談に来た場所でもあり、ここまでの顕著さは特殊例だともいえる。一般には、『フーズフー』記載者に顕著だが、必ずしも全ての幹部が、民族運動・学生運動に関係していたわけではない。同書からは、大商人の子、地主の子など、単なる金持ちの子供が幹部になった例も読み取れる^⑬。ギェヨットがバジャンに行ったインタビュアーでも、それまで社会奉仕をやっていた人(多くは公務員)を集めて中心としたとの話であり^⑭、民族運動との関係には言及されていない。

B 一般メンバーについて

『タマイン』は、アシャの初期のメンバー募集の傾向を示すものとして、バジャンの「誰でも受け入れようとする役目を果たせなくなるので最初は制限」との言葉を載せている^⑭。応募者が、滅私的に国や他人に奉仕する人かどうかを見極わめてからメンバーとしたという。その際、申し込み書は本部で配布し、住所・氏名や学歴・ボランティア経験の有無などを書くと共に、メンバーの推薦書二通を添える必要があったという。また当初入会費は、一六〇歳の普通会員が半チャット、年会費が一チャット^⑮（三〇歳以上の特別会員はそれぞれ一、三チャット）だった。

このメンバー厳選・少数主義は、前述のように四三年以後解かれ、メンバーは急増する。また、四三年七月一九日の本部・県オルガナイザー会議では、年齢の下限が広げられ、一二〜一六歳の男女を取り入れ、準備ができた第ボイスカウト部に編成することになった^⑯（八月一日の新聞で発表）。が、誰彼構わず受け付ける方針に転じたわけではない。四三年一二月のメンバー募集指令第一号の第一項では、善良な者のみを選ぶことが指示されている。また四四年六月一四日の命令で、責任者達が保証できる人だけを受け付けろとの指示がなされたという^⑰（その理由は、アシャが対日レジスタンス活動に加わり始めたことが漏れないようにするためだという）。

では、具体的にどのようなにしてメンバーを集めたのだが、この点に関する『タマイン』の記述は、極めて簡単である。本部から派遣されたオルガナイザーが、町や村を巡回して懸命に呼びかけると、国に尽くそうという若者多数が、自発的に集まってきたというのである^⑱。ただし、筆者が行ったインタビューでは、友人から友人へ呼び掛けて勧誘する方法もかなり一般化していたことが窺えた。だが、後述するアシャルーゲーの人気ぶりからすると、当初から国への奉仕精神を持っていたか否かともかく、自ら志願する者が多いという側面は、確かにあったと考えられる。

ところで、加入者の階層については、現地点では史料の限界のため、確定的なことを述べる準備はない。ただし第一節で見たように、組織は町だけでなく村にもかなり展開しており、都市民だけでなく村民の加入度合も大きかったことが推定できる^⑲。

A 人気の有無

日本側史料は、「ビルマ軍政史」にしても、新聞類にしても、総じてアシャルゲーの活発な活動を伝えている。対す

るイギリス側の史料でも、一九四四年六月六日の、インドにいたビルマ総督、ドーマン・スミスの報告^⑧によると、ビルマに関する情報として、次のような指摘がなされている。——日本の統治政策は失敗し、統治機構は動いていない。East Asia Youth League により自発的になされていることだけが、統治的機能である。East Asia Youth League は、人気があり熱狂的である。——このように当時のイギリス側の諜報でも、アシャの人気は認められていたのである。

また現在のビルマの公的見解も、『タマイン』に見られるように、アシャルゲーは、若者に対してだけでなく国民全体に大人気だったというものである。また八年生用、歴史の国定教科書^⑨でも、日本軍の暴虐を述べながらも、アシャの組織後は、社会活動・組織活動が有効に行われるようになったと、アシャにだけは好意的記述がなされている。

さらに、筆者が行ったインタビューでも表1のように大部の人がアシャルゲーの人気を認めていた（しかも、彼らの多くは日本軍に対して何らかの批判を行っており、この回答が専ら筆者への気遣いに基づくものとはいえない）。結局、個人的好き嫌いはあり得たにせよ、一般にアシャルゲーが人気を持っていたことは否定できないといえる。

表1 アシャルゲーの人気についてのインタビュー結果

	人気あり—うち日本批判	人気なし	わからない・他
存在を知っている			
（加入者）	23—20	0	0
（非加入者）	21—12	2	3
名だけ知っている		10	
名も知らない		5	
聞くタイミングを逸した人		8	

・他にも諸事情で聞けなかった人がいる。

B 人気の原因

その人気の原因の究明を、対照的に人気が少なかった警防隊（ウンダン・アプエ）との相違点を手掛かりとして、試みることにする。ただしその考察は、史料主義ではなく、論理主義になっていることを断っておく。

まず活動内容に関しては、ビルマの独立・独立維持のためとのスローガンの下、日本軍への協力（例えば労務者募集、奉仕活動（清掃・消防・土木作業など）をなす点では、共通している。アシャルゲーター独自のものとしては、バランガーダンの向上の訓練、演劇活動などがある。これらの個別活動は別稿で論じるが、運動会やスポーツの試合、討論会やコンテストなど、若者を魅きつけ得る活動が盛んに行われたのであり、それが、アシャの人気を支える一因となったと考えられる。^②

また、参加者については大きく二つの違いがある。まず年齢面では、警防隊が幅広く住民全体を対象とし、より上の世代の者（特に市長や村長）が主導したのに対し、アシャルゲーターは青少年が中心であった。中高年齢よりも活動的である青少年が、組織の中心となった点に、アシャルゲーターの活性の素地があったとの推定ができよう。さらに、警防隊への参加が半ば強制だったのに対し、アシャルゲーターは志願制であり、この点からも活性の差が現れたといえる。

- ① 『タマイン』七八八〜七九六頁所収。
- ② 『タマイン』一七一頁。
- ③ 『タマイン』一九四頁。
- ④ 『タマイン』二〇七頁。
- ⑤ 『タマイン』二二二頁所収。
- ⑥ 『タマイン』六五四〜六六五頁所収。あくまで四五年以降に編纂されたものだが、記載地の多くは、確かに筆者の聞き取りでも存在を確認できた場所である。

⑦ 他というのは、町か村かの記載がないもの。ただタイツネーは町に入れた。印刷不鮮明、語の切れ目が難解な部分もあり、筆者の読みが絶対的に正しいわけではない。支組織の語は、村落集団の語と対句的

に使われているが、必ずしも全てが町への属性を有していたわけではない。村に置かれた支組織も数多く見出せる。これは、「アシャルゲーター各カヤイン支組織・集団のオルガナイザーと委員会メンバー責任者一覧」（六六六〜七五五頁、以下「アシャルゲーター地方幹部一覧」と記す）と対比すればはつきりするが、要するに「村落集団」は、独自の執行委員会を持たないもの（メンバー募集指令第一号に見られるように、一〇〇人以下の集団）であり、一〇〇人を超えれば支組織に昇格し、執行委員会を持ったのである。

⑧ 『タマイン』一七二〜一七七頁。

⑨ 例えば「桜井徳太郎（少将）日記」（防衛庁戦史部蔵）の、四四年八月一九日の「アキア県遊撃軍、十一月一〇日の「アラカン土民軍」

などの記載。他に『砲煙シッターに消ゆ』（菊砲第五中隊戦史編集委員会、一九七九）記載の、モーフニンの青年義勇隊など。

⑩ 前掲友田二八〇三三頁。

⑪ Thein Pe Myint/R. H. Taylor 'Wartime Traveler' 1963 / 1984, in "Marxism and Resistance in Burma 1942-1945", Ohio University Press, p. 263.

⑫ 例えばウー・ベータン、ウー・ミヤセインの例。

⑬ 前掲ギョット二九二頁。筆者の手によるインタビュエーでも、確かに民族・学生運動関係者が、アシヤに入り、地方幹部となったという例が多数得られた。その半面、反英運動と無関係な者が地方幹部となった例も、多く得た。一例を挙げると、デルタのンガブドー町支組織では、元情報責任者のウ・バマウンの談話では、自身は同町出身の高校生、委員長のコウ・サンミヤも高校生、会計のコウ・チローオウンは中学を中退、書記長のコウ・チローミンも高校生、カヤバラのコウ・トゥンイーは中卒者だったが、特に学生運動との繋がりはなかったという。

⑭ 『タマイン』一〇四〜一〇六頁。

⑮ 当時の一チャットの価値は、『ビルマ新聞』四三年一月一日によると、公価でタバコ二本半に相当。また『タマイン』一一六頁では、

第三章 アシヤルーゲーからバラサへ

第一節 対日蜂起との関わり

当初は解放軍扱いされ、歓迎された日本軍も、その品行の劣悪さに加え、泰緬鉄道の建設に駆り出された労務者の過酷な労働事情が広く知られるようになると、急速に人気を失っていった。そして、排日気運の中タキン党の各派が連合し、

一ヶ月の生活費は一〇〇チャット程度だったという。

⑯ 『タマイン』一四四頁。

⑰ 『タマイン』一九四〜一九五頁。

⑱ 『タマイン』一五一〜一五二頁、一七一頁。巡回の具体例は、シャン高原での行動が詳しい。

⑲ なおB I A（四二年七月解散）とアシヤルーゲーとは、反英独立というスローガンが共通することから、理論的に一定規模のメンバーの重複が予測できる。実際、『フーズフリー』は、ウー・ユースインなどの移行例を記し、また太田氏も、特にB I Aから多数の参加者を得たと記している（二五九頁）。

⑳ in Hugh Tinker "Burma: the Struggle for Independence 1944-1948" 1983, Her Majesty's Stationary Office. 同書は主にイギリス側の電報を集めた、二〇〇〇ページを超える。大史料集。

㉑ 越田稜編『アジアの教科書に書かれた日本の戦争』東南アジア篇、一九九〇、梨の木舎、一三二頁による。

㉒ ギョットもインタビュエーを根拠に、両者の人気差の原因を、実用的に楽しくないウンダンに対し、アシヤルーゲーの活動が「楽しい余暇」と感じられたからだとして纏めている（二八九、二九九頁など）。

一九四四年八月には秘密裏に大同団結組織・パタパ（のちパサパラ）が結成される。パサパラは、まず日本を追い出しその次にイギリスと対決することを方針とし、組織化を進める。①そして最終的に、日本の敗勢が決定的となった四五年三月に対日蜂起を始めるのである。

研究史上、パサパラが対日蜂起段階で、軍以外に十分な大衆組織（アシャルーゲーを含めて）を持っていたか否かは、意見が分かれている。ビルマ側研究では、国軍支配を正当化する目的もあり、大衆の支持・協力があつたと主張されるが、②対して根本氏は、大衆組織の存在を限定的に捉えている（主根拠は、ビルマ軍側原史料に、大規模さを示すものが見当らないこと）。この論議は、史料不足のため実証的解明には限界のある課題である。アシャルーゲーについても、断片的文献史料とインタビュ어의結果をまとめる限り、密接にパサパラと関わり、軍と共にパサパラを支えた地区も存在する、という程度のことしか確実にはいえない。④

第二節 アシャルーゲーからバラサへ

ともあれ重要なのは、実戦参加の規模がどうであれ、最終的にはアシャがパサパラの主力構成者の一つとなった事実である。例えば、五月一四日のパサパラの記者会見時の史料⑤からは、パサパラを構成する諸組織の中に、アシャルーゲーも含まれていることがわかる。また五月二九日の、ヤンゴンでパサパラ側と交渉していた、英軍のリンドップ准将の報告では、'Anti-Fascist League'（ハサパラのこと）の別名が 'East Asia Youth League' だと記されている。⑥

『タイムイン』も、四一六月頃のアシャの活動を次のように記している。⑦
 ・アシャのヤンゴン本部の建物の下半分がパサパラ本部になった。
 ・メンバーがパサパラのために地方への連絡に行った。
 ・集めた服をビルマ軍に渡した。
 ・パサパラが対英闘争のため支部づくりをするのに、建物や机などを探し、また支部の執行機関員となった。
 ・反英集会、ボイコットに参加した（ただし、個々の話は具体的だが根拠は示されず）。これに対してイギリス側も、アシャルーゲーのメンバーを各

地で逮捕し、バジヤンにも政治活動をしないよう勧告したという。さらに同書は、アシャの本部常任委員が引き続き、バランガーダンの向上、国民への奉仕、独立の力になることを目指し、バサバラを支えようとして、七月二十八日には第三回アシャルゲー会議を開いたとする。この時、ビルマ独立と復興のために、アシャルゲーの名をバラサと変えて活動を継続することを決め、また新段階に合わせて規則を修整するための委員会をつくったという(委員二〇人のうち七人は、バジヤン以下のアシャルゲーの本部常任委員と県のオルガナイザー。また、バサバラ書記長のタキン・タントウンの名もある)。

実際、この時期にバジヤンは、バサバラの最高機関である行政委員会にも加わっていた(アウンサンやタントウンなど一四人の一人)。バサバラ首脳の一人としても、アシャルゲーを独立闘争に導いていたのである。しかも、九月一四日のランズ総督の見解^⑩では、バジヤンとその青年組織は、共産党(タントウン以下バサバラ主要幹部の多くが所属)並みに有力だとされている。

話を『タマイン』に戻すが、規則修整の完了後、九月二〇日にはバラサの発足式が行われたという。この時、発表されたバラサの主要方針は、①若者達が良い国民、良いリーダーになるために教育する、②ビルマの独立と向上のために各自が滅私的に尽くす、③世界の諸国家、諸民族と協調する、だったという(つまり、アシャルゲーの根本方針とほぼ同じ)。また式では、アウンサンらバサバラ首脳の演説もなされ、バラサ幹部の発表もなされたという。

その一覧は以下の通り。()内は元の役職。

- ①委員長↓コウ・バジヤン(アシャ本部委員長)
- ②副委員長↓コウ・チョウンブン(アシャ本部副委員長)
- ③会計責任者↓コウ・タートゥ(アシャ本部会計責任者)
- ④書記長↓コウ・ミョウアン(アシャ県オルガナイザー)
- ⑤ニャナバラ責任者↓コウ・トゥンミン(アシャ本部ニャナバラと奉仕責任者)
- ⑥奉仕責任者↓コウ・イニートニョン(アシャ県オルガナイザー)
- ⑦カヤバラ責任者↓コウ・クン(アシャ県オルガナイザー)
- ⑧情報責任者↓コウ・チンマウン(アシャ県オルガナイザー)
- ⑨ボーイスカウト責任者↓コウ・セイントゥン(アシャ県オルガナイザー)
- ⑩若者雑誌出版責任者↓コウ・マウンマウンキン(アシャ

県オルガナイザー） ⑪ 執行機関員↓コウ・テインウイン（アシャ本部奉仕と情報責任者） ⑫ 執行機関員↓マ・オウン（アシャ本部女性部副委員長） ⑬ 執行機関員↓マ・イーチニイン（アシャ本部女性部書記長） ⑭ 執行機関員↓コウ・ボウンミン（アシャ県オルガナイザー）

また、県の責任者は次の通り。

① シュエボウとモウンユワローコウ・タンニユン（アシャ本部事務責任者） ② マンダレーとサガイン↓コウ・タンミン（レップンダン町アシャ書記長） ③ ミンジャンとパコック↓コウ・チンスエ ④ ミンブーとマグエー↓コウ・イ（アシャミンブー県オルガナイザー） ⑤ メエイットイーラとチャウツセー↓コウ・チョーゾー（アシャ本部事務員） ⑥ ヤメーションとタウングー↓コウ・シエインフラチョー（インセイイン町アシャ書記長） ⑦ バゴー↓コウ・テインタン ⑧ インセイイン↓コウ・チョーイン（アシャインセイイン県オルガナイザー） ⑨ タヤワディーとヒンダター↓コウ・チンマウンニユン（ミヤウンミヤ町のアシャ） ⑩ ビイとタイエツ↓コウ・タンマウン（アシャ県オルガナイザー） ⑪ パテニイン↓コウ・チントウン（チャンギン町アシャ委員長） ⑫ ミヤウンミヤ↓コウ・キンマウン ⑬ ビャーポウンとマウビン↓コウ・タンチン ⑭ ハンターワディー↓コウ・コウジ ⑮ ヤンゴン↓コウ・ボウンミン（アシャ県オルガナイザー） ⑯ タトウンとモーラミヤイン↓コウ・ソウミン（インセイイン町アシャ委員長）

以上のように、バラサの最上級幹部のほぼ全員が元のアシャルーゲーの幹部であり、特に本部常任委員は、元の中心グループ（本部常任委員と、その直接の教育を受けた県オルガナイザー）で固められている。『タマイン』はさらに、本部が持っていた金、食糧、机や椅子、文書は全てバラサに引き継がれ、六〇〇以上になっていた支部や八万を超えていたメンバーも受け継がれたとする。そして、対英ボイコットを呼び掛けるなど独立闘争に協力したと記し、話を結んでいる。実際、以後もバラサがパサパラの祝賀パレードや、宣伝活動に参加していたことは確認できる（タキン・タントウン四六年一月二四日報告↓バラサがパサパラ会議に参加。『ミヤンマアリン』三月二日↓バラサが反ファシズム戦祝賀祭に参加。『ミヤンマアリン』五月一

五日↓バサバラ会議に参加。英側犯罪調査局五月三十一日報告↓バサバラ会議に参加。『ハンターワデー』七月二五日↓バラサなどがバサバラの下で団結。『ニュータイムズオブバーマ』四七年九月二八日↓バラサが武器回収運動^{⑩⑪⑫}。

① この頃のバサバラの動勢は、大野前掲論文に詳しい。イギリスが独立を許容しないなら武装闘争を行うと、当初から定められていた。

② 例えば、前掲の国定教科書、前掲『Burma and General Ne Win』; thakin tin nya. "pe?si? tau? lan-ye: tana. jou? nin tain: statin:" 1968, Iamssapetai?; Dhamnika U Ba Than "The roots of the Revolution" 1962, Government Printing Press.

③ 根本教「ビルマ抗日闘争の史的考察」、共著『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』、一九九一、東京外大。が、全体を見通し得る一次史料が少ないため、これもあくまで暫定的提言である。

④ 例えばメイッテイヤのように、ビルマ側回想・回想記だけでなく、英軍の原史料(四五年五月一日付第一四軍報告→前掲『バーマ』所収)からも、アシヤの軍支援を裏付けられる地域もある。『タイムン』は、アシヤの対日戦参加者から一七の回想記を集め(八二六〜八三二頁)、判明する限りのものとして、一四二人の戦死者の名前・戦死日・場所・死の状況を一覧化している(八三二〜八四五頁)。

⑤ この史料は根本前掲論文(一六〇頁)で紹介されている(「ビルマ国防省所蔵 DR 92a」)。他に『タイムズ』四五年五月三一日も、この記者会見を取り上げ、アシヤがバサバラの一員であると伝えている。

⑥ 前掲『バーマ』所収。

⑦ 以下の『タイムン』の記載は、五六四〜五八八頁による。

⑧ 四五年二月一七日や、四六年五月三十一日の英側犯罪調査局の報告による(共に『バーマ』所収)。なおバジヤンは、その後アウンサンが行政参事会をつくと、その労相となり、以後も関係を歴任した。

⑨ 『バーマ』所収。

⑩ バラサの歌①(『タイムン』八〇五頁所収)でも、独立、バランドン向上、他国との協調などが謳われている。

⑪ コック・ソウミンは、後にバラサ書記長となった(本人、ウー・タントウ、ドー・イーチエインへのインタビュー)。氏の談話では、この時も本部でバラサの県責任者の講習があり、バジヤンやタートウから直接に「バランガードンや空手、スビーチの訓練を受けたという(期間は三ヶ月程)。

⑫ タントウンメモと犯罪調査局報告と『ニュータイムズ』は『バーマ』所収。他は「bojon? aunsan: i. lu? la? ye: co: ban: ni. u. la. zin ni? tan: 1945-47" (me-my. ki? swe, 1980, began sa-ou?) 所収→同書は当該期の新聞集。またバジヤンの回想でも、組織は四八年末までバサバラの「active element」として続いたとある(前掲ケイデー四六五頁)。

⑬ ただし実際には、バラサからはすぐに共産勢力(最も急進的に対英闘争を行った)が分離する。これは以後の内戦の原因ともなり、現代政治に直接に関わる問題のため、一次史料で跡付けることは難しい。そのため参考程度の指摘にとどめるが、既にギュヨットは、インタビューを根拠として、アシヤの最初の県オルガナイザーの半分が、共産軍に「献身」したと記している(二九六頁)。また筆者が、元ブライベート・スタール生のウー・タントウ(氏自身、共産軍入り)に尋ねたところ、先のバラサの県責任者のうち、①③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪が共産軍入りしたという。その他、例えばビャーボウン町アシャルギー支組織委員の中では八人が、同町の共産勢力幹部に転じ、一般メンバーの約半分がそれに従うなど、様々な事例を聞くことができた。その詳し

い紹介は別の機会に譲りたい。

⑭ またベラサから、パサバラ自体に入る者や、PVO（四五年秋に置かれたパサバラの私兵的組織）に転化する者があったことも指摘しておく（その際、アシャ時代の軍事訓練が役立ったといえる）。例えば『フーズブー』は、アシャのパコック支部長だったウー・セインフラ

は、レジスタンス参加後、四五～四六年に同地区パサバラの、President になったなどの事例を記している。またケイディーは、バジャンの回想に依拠しつつ、ベラサはリーダーシップと精神の点で、PVOのややベテランに密接に加わっていた（closely affiliated）と記している（五一九頁）。

まとめと展望

以上見てきたように、アシャルーゲーは、戦前の民族・学生運動の指導者（特にタキン）を本部・地方の幹部に含み込みながら成立し、組織として制度化を進め、日本敗退後はパサバラの対英独立闘争を支えることになった。特に、パサバラの組織化が開始されたばかりの一九四五～四六年地点では、その比重は極めて高く、規模的には最有力組織だったといえる。

では、その歴史的意義はどう纏められるだろうか。その際、検討すべきは、戦前の民族・学生運動の高次化にどの程度貢献できたかという点である。が、それは、戦前の反植民地闘争を位置付ける際の一次史料が、質量共に限定され、組織化の度合いの明確化が困難である以上、厄介な作業である。そこで、視角を数点に絞り、その解答を展望する。

まず、アウンサン、バモオ、テインペーミン、ウー・バセエラ、ビルマ人活動家自身の回想^①でも、あるいはイギリス側の一般的な感覚^②でも、戦前の自由ブロックやタキンの大衆組織化の度合いは、相対視されている点を指摘したい。これらは、あくまで主観が記された史料であるが、特にビルマ側のもものは、彼らの政治的正統性を逆に引き下げるにも拘わらず、なされた発言・記述である。故に、客観的事実を表している可能性は高く、それならば、アシャルーゲーのような愛国独立を謳う活動的大組織の登場の、ビルマ独立への貢献は大きいことになる。

また、アシャルーゲーが、一本の命令系統を持つ組織だったという点にも注目すべきである。戦前のタキンが各派閥の

総称であり(アウンサンも一派の有力者にすぎない)、方向性がまちまちだったことは一般に認められている。またバジャンが、当初は、単一の青年組織をつくるのを不可能だと考えていたというのも、それ以前のこの種の団体には、統一性が不足していたことを窺わせる。それ故に、アシャルレーが強固な求心力を持ち、五〇六万人からなる一枚岩の組織として成立したことは、組織面での高次化といえよう。

それから、活動者(恒常的なもの)の増加の有無については、算定基準を確立させ難いため容易には結論は出せない。が、アシャルレーには、ンガブドーのように幹部レベルにさえ元々民族運動と無関係だった者が多い支部が存在する。そのことからすれば、新たに独立闘争に組み入れたメンバーが、確かに幾許か存在したことは否定できないといえる。

本論は、日本の東南アジア占領の現地側への影響を問う一里塚として纏めたものであり、今後検討していかねばならぬ課題は多い。アシャルレー自体まだ全てを論じ尽くしたわけではないし、戦前の民族・学生運動の状況も、より正確に把握していかねばならない。できることならば、罰則の有無(その履行送)、支部展開の詳細、加入者の活動レベルごとの数を数値化し、アシャルレーのものと比較する必要があるだろう。

このようなビルマに見られる現象の、日本占領下にあった他地域での起否の有無の究明は、今後の課題としておく。例えばジャワの青年団は、ビルマ同様に「心身訓練」や軍事訓練を行っていた。カナヘレら^⑤は特にその軍事・精神訓練が戦後にもたらした意義を強調している。対して倉沢愛子氏は、インタビュを根拠に、訓練はおざなりであり若者をひきつけられなかったと結論づけ、その意味では評価は高くない。

筆者としては、今後、ベトナムの事例の位置付けなども含め、実態把握・組織分析を進めた上で、比較(比較可能であるならば)・検討を行う抱負を持っている。^{⑦⑧}

① アウンサンの四五年八月二九日演説では、大衆喚起の困難さへの苛

立ちが、三十人志士の日本行きの一因になったと発言されている(三)

③ Uin ji: "bojour? aunsan: mein, gun: mya:." 1971, sape bei? man, p. 8). またキーン・ミンは、自分達の組織力・指導性は欠如してゐたこと(heim: pe myin, "talanye: kala, nainganye: siwe: ak'mya:." 1956, yamou? na sape, p. 38) キーンは自由運動の指導力が解体状態だと記し(キーン／横堀洋一『ビルマの夜明け』一九七三、太陽出版、一四八頁)、『ウー・ミン』は一貫した各派不統一の状況を記してゐる(U Ba Swe "The Burmese Revolution" 1952, People's Literature Committee & House, pp. 33-35)。他に元南機関員の泉谷氏にキーンと三十人志士側は脱出当時、地下運動が「何らの希望もなく前途は暗澹たるもの」だったと語っていたという(泉谷前掲書、一五四～一五五頁)。

④ イギリスは再来時にも、何等タキンの立場を認めない「ビルマ白書」に臨んだ。コリス (M. Collis "Last and First in Burma, 1941-1948" 1956, Faber and Faber, p. 196) は、このイギリス側のタキン親を「ミス・スミス総督の見解を例に、「民衆の極小部分しか代表しない」とるに足らぬ愚鈍な馬鹿者ども」との言葉で纏めている。

⑤ 例えは矢野徹氏は「曖昧な共同戦線」と表現し、五派に分類し一覽

表化している(『タイ・ビルマ現代政治史研究』一九六八、京大東南アジア研、三三三頁)。

⑥ 前掲キーン・マート二九二頁。友田回想記でも、ヘンジャン、ウー・ティン、フラシエエのいずれもが、アシヤの設立案を見て、既存の各種団体の統合は困難だと反論したとある(二七、二九頁)。

⑦ ショーシ・S・カナヘレ／後藤・近藤・白石『日本軍政とインドネシア独立』一九七七、鳳出版、一二四～一二三頁など。

⑧ 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』一九九二、草思社、三〇八～三一八頁。

⑨ インドネシアの歴史教科書では、日本占領期の利点として青年団への軍事教練があげられており(スロト／伊東定典『世界の歴史教科書シリーズ』三二、一九八三、帝國書院)、これはカナヘレ論文の補強になり得る。

⑩ 古田元夫氏の御教示によると、ヘトナムでも、日本占領下で形成された合法的青年運動が、大戦後の独立闘争で大きな役割を果たしたという。

(名古屋大学大学院博士後期課程)

The Influence of the East Asia Youths' League (əsha. luŋɛ) on Burmese Independence Movements

by

TAKESHIMA Yoshinari

This paper attempts to explore the significance of Japanese occupation in Southeast Asia by examining the role of the East Asia Youths' League (əsha. luŋɛ), formed in Burma under Japanese rule. Though an institutional analysis, the process of the League's formation and growth into a large, popular organization with a membership of fifty to sixty thousand is chronicled. During the post-war period, the League became one of the most powerful organizations in Burma and contributed to the AFPFL's resistance to the British Empire. Because nationalist leaders such as Bogyou Aung San confessed that prior to the war the popularization of the Thakin party had been exceedingly difficult, the significance of a popular mass organization such as the League should be manifest. In short, the League helped propel the cause of Burmese independence.

The Origin and Development of the Trotskyites in China

by

KIKUCHI Kazutaka

The Trotskyite faction of the Chinese Communist Party was primarily composed of those Chinese who had studied abroad in Moscow, and followers of Chen Du-xiu (陳独秀), who had been expelled from the Chinese Communist Party. In their struggle against Stalin and the bureaucratic control of Comintern, the Trotskyites emphasized democracy, and furthermore increasingly criticized the Soviet Union for promoting its national interests at the expense of world communism. Although the move of the Chinese Communist Party from urban areas to the countryside was to lay the groundwork for the ultimate success of the